

語り継ぐ、明日へ。

歴史はいつも未来へのみちしるべです
世の中の進むスピードと自分の生きていくペースが
少し合わなくなってきたなと感じ始めたら
いつか来た道まで戻ってみましょう



ボクたちの 「収穫の秋」

田んぼや畑ばかりでなく、秋は子供たちにも収穫期。ヤマブドウやコクワのように秘密の場所にあるものもあれば、街の中で採れるものもあります。だれのものかということにはお構いなく堂々と収穫するのは公園のクリ。イソップ童話のキツネは、手が届かなければ「あれはまずいんだ」とあきらめますが、そんな意気地なしではないので、つい靴が帰らぬものに。家に持ち帰って母親にねだって、ゆでたり焼いたり、クリご飯にしてもらったり。今ではクリもあまり食べなくなりました。クルミやトチノキ、ギンナン、ドングリなどにも思い出がたくさんあります。

ひと街ごと No.25

- ・時の街角／旧三河本そば店——2
- ・マチの博物館／おもちゃの平野——3
- ・あるばむレトロボリス／北大ポプラ並木——4
- ・川筋を行く／石狩川⑥——5
- ・集まれ、未来の職人たち——6
- ・道具で道草30年——7
- ・時計のある風景——8

二〇〇八年 秋(全四回発行)

発行：(社)印刷紙工

札幌市中央区南十五条西十八丁目
TEL (011) 561-1159

編集：ひと街ごと刊行会

札幌市中央区北一条西十七丁目 北海道不動産会館四階
(向)編集工房 海内 TEL (011) 633-1651

時の街角

北海道開拓の村から

何事も手づくりが注目される昨今、
粋なそば屋があちこちに多くなりましたが、
中にはノレンをくぐりにくい店もあるようです。
そばとはそもそも庶民的な食べ物ということ
を思い出させてくれる店に入ってみました。

港町の粋なそば屋 宴会もできた社交場

旧三河本そば店

明治四十二年（一九〇九）ころ建築

昼休みや買物がてらに素早くす
すつてさつと席を立つ、そうした昔
ながらのそば屋が目につく小樽。そ
の原点の一つが、ここで紹介する旧

三河本そば店の経営者だった河本
徳松は、石川県出身で明治十八年
（二八八五）に来道。小樽市内のそ
ば屋で修行の後、同店に入って明治

三河本そば店です。
明治以降に本州の文化の入つてき
た北海道。そば（そば切り）もま
た例外ではありません。札幌で最
初にそば屋が開業したのは明治五年
（二八七二）だそうですから、開
拓使が置かれて三年後のこと。
小樽では、釧路市のそば店の
老舗・竹老園（東家総本店）の
創業者が明治七年、妙見河畔で
始めた夜鳴きそば屋が最初。店
舗を構えての営業が明治十年ご
ろとされています。

二十四年に経営を引き継ぎました。
そして明治四十二年（一九〇九）ころ、
旧若松町に新築したのがこの建物。
当時のそば屋は宴会や会合の場でも
ありましたから、座敷が広く、酒
や料理が出されたものです。芸者来
も出入していたそうですから、場所
としてはまず役所や停車場に近いと
ころ。ここも、明治初期には開拓使
出張所などの役所が集まった地域に
隣接していました。

本州の老舗にも引けを取らないよ
うな粋な外観がまず、そうした雰囲気
を伝えていきます。正面左の玄関が
客用で、中に入るとすぐに二階へ上
がる階段があり、右手は調理場。井
戸水をくみ上げるポンプ、大きな



まど、レンガの煙突、積み上げられ
たセイロなどが、往時の盛況ぶりを
物語っています。
二階は見る事ができませんが、
客室が大小五部屋、それぞれふすま
を外せば五十人ほどの宴会は可能な

広さです。楽しみの少なかった当時
のちよつとした社交場でもあったこ
とでしょう。
ちなみに、三河の店名を受け継ぐ
店が小樽にまだあります。訪ねて昔
話を聞くのも一興です。

和洋折衷の造りとはいえ
基本は和風、本州風
客室は2階。すべて座敷になっている

料亭も兼ねていただけにいかにも粋な外観
大勢の客を一度にさばけるよう調理場も広い
※参考文献／「竹老園物語」竹老園東家総本店「小樽の蕎麦屋の始まり」飯半H.P.

幼いころ、どんなおもちゃで遊んでいたか聞くだけでその人の年齢がだいたいわかります。それだけ時代とともにおもちゃは変化してきましたしおもちゃ屋さんも変わってしまいました。

独立店舗で創業五十年

三万点の品ぞろえ。

商店街のその前を通るときに聞こえてくる賑やかな音。小さな子供はすぐに親の手を引つ張って中へ。親は高い買い物にならないように洪々と――そんな思い出のあるおもちゃ屋が姿を消しました。いまはショッピングセンターなど大型店の中です。旧国道五号線と琴似本通りがぶつかる角地にある「おもちゃの平野」は、残り少なくなった昔懐かしい個人経営の独立

店舗。創業五十年という老舗で、東区の支店とともに家族経営で頑張っています。当初は文房具店として出発しましたが、次第におもちゃが主力となり、長男で部長の平野裕康さん（三七）はおもちゃに囲まれて大きくなったといっています。大型店に対抗するには、豊富な商品知



一階二階にすき間なく陳列されたおもちゃの数々。子供ならずとも夢が広がる

夕方になると近所の小中学生の「原っぱ」に



長男の平野裕康部長

識ときめ細かいサービスというところで、そろえてある商品は一、二階合わせて三万点。ロボット、ミニカー、プラモデル、リカちゃん人形、盤ゲームなど、ないものはないくらいですが、最近では流行や子供たちの心をつかみにくくなっていることも確か。一人人が持っている人なに広がるというパターンがみられなくなり、はやるといってもせいぜい三カ月くらい（平野部長。子供たちの好みも多様化しているようです。）。とはいえ、定番商品と季節に応じた品ぞろえには目配りを忘れません。前者にはカードやプラモデル、盤ゲーム、風船、ビー玉など。後者は、これからクリスマス、春はひな人形、武者人形。夏になると海水浴商品や百種類はあるという花火。季節物はやはり道行く人の目を引きまします。平野部長の日課の一つは、夕方になるとやってくる近所の小中学生の相手。小

銭を握って十円、二十円の駄菓子を求めるのは昔と同じですし、二階のミニ四駆のレースコー



ブリキのおもちゃや駄菓子類は年間を通じての定番

とは寂しい話ですが。



やはり主力は男の子向けのミニカーやプラモデル



(左)昭和15年(1940)。並木というにはまだ若い
(右上)昭和10年(1935) (右下)昭和35年(1960)
(3枚とも札幌市写真ライブラリー提供)



農場の中から望むポプラ並木
倒木の間にJRタワーが見える



あるばお レトロポリス

北大ポプラ並木

都市の風景といえば建物や道路ばかりではありません。人の手を経た庭園、街路の木々もまたその一部です。その生命の尽きる時、あるいは災害の及ぶときには、彼らもまた建物同様に、長年親しまれた姿を変えざるをえません。

明治の生き残った遺産 台風被害で再生途中

最も北海道らしい風景の一つとして、北大のポプラ並木を挙げることに異存のある人はいないでしょう。それほど市民にも観光客にも親しまれている場所です。大学構内の建物も日々変貌している現在、昔から変わらないのはここだけ、ではあります。四十年前の台風を憶えていますか。見るのも痛々しかった倒木の数々――。

樹木とはいえ、植えてから大きく生長し、一つの風景としていかにも昔からあったかのごとく人々の目に定着するまでには長い年月のかかるものです。ポプラが北海道に伝わったのは明

治の中ごろ。防風林用だったそうで、北大のポプラ並木として最初に植えられたのは明治三十六年(一九〇三)のこと。その後、学生たちが本格的に並木づくりに取り組んで、観光名所になるほどの立派な並木に生長しました。

しかし、ポプラの寿命は六十年から七十年といわれており、昭和四十年代半ばあたりから老朽化による倒木が危惧され、観光客などは立ち入り禁止の状況が続いていました。

そこで迎えた北大創基百二十五周年事業。平成十三年(二〇〇〇)十月に新たに誕生したのが「平成ポプラ並木」。旧ポプラ並木から北へ五百メートル離れた地点に、東西約三百メートルにわたって七十本の若木が植えられたのです。農場の外れ、手稲山を望むのは旧ポプラ並木と同じ。新たな名所になるのが待たれます。

しかしそんな面白い話題もつかの間。三年後の同十六年九月の台風の来襲でした。旧ポプラ並木の五十一本中、倒壊も含めて二十七本が大きな被害にあつたのです。このニュースが全国に伝わるや、たちまち並木再生の気運が盛り上がり、支援集めが始まったのは周知の通りです。再生作業は、根元から倒れた十九本のうち二本を植え直し、残りは並木のポプラの枝を育てた若木を植え込むというものでした。

現在、ポプラ並木は入り口から八十メートルまで散策が可能です。ウッドチップも敷かれて足にはすこく快適。老木と若木の凸凹を目の当たりにするにはいささかつらいという人もいるかもしれませんが、機会がありました一度どうぞ。



平成十三年に植えられた平成ポプラ並木
七十本が手稲山方向に向かって

石狩川

サケ漁盛衰

夢の百五十万匹捕獲時代 カムバック、もつと街へ

サケが幻の魚になりそうな時代があった——
石狩川でのことです
乱獲が原因の一つであることはニシンと同様ですが
大河ゆえの宿命は水質の汚染
百万匹も捕れた明治時代からの歴史を

サケといえは石狩川。

近海での定置網漁が主流になって、
道東や十勝、日高方面などのサケ
が有名になりましたが、内水面(河
川・湖沼)でのサケ漁の原点はこ
こ、といつても過言ではない
でしょう。

黄金期は明治時代。明治五
年(一八七二)に百四十五万
匹、同十五年は百四十八万匹
も捕れた記録があり、明治
三十年から四十年にかけては
二、三十万匹とコンスタント
に。ちなみに同五年十月十日
は、日本で最初に缶詰工場が
石狩にできた日。もちろんサ
ケの缶詰で、この日は「缶詰
の日」に制定(日本缶詰協会
されています)。

その後は、時代が進むにつ
れて上流部の開発、支流域の

昭和30年代のサケ漁(「石狩市 20世紀に伝える写真集」から複写)



川筋を行く

人と川の
様々な
かかわりを
たずねて

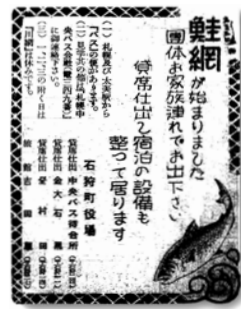
堪能し
て帰ったも
のでした。サケ

まつりも昭和三十八
年(一九六三)に始ま
りました。

しかし水質汚染は深刻で、
漁獲高は低迷。昭和四十二年に
は五千三百匹しか捕れず、つい
に同四十五年、地引き網漁は中止
定置網漁も同四十九年に五百二十
匹と過去最低を記録するまでに落
ち込みました。現在は、旧石狩市
のサケ漁は石狩湾新港近くの四カ

場廃液の流入など
で、水質は汚染の一途を
たどりましました。

それでも下の新聞広告にあると
おり、戦後も季節になると観光客
が河口近くでの地引き網を見物に
訪れ、捕れたばかりのサケの味を



サケ漁開始を知らせる広告
(北海タイムス昭和23年9月21日)

所で定置網漁だけが行われていま
す。

それでも「サケは石狩」のブラ
ンドに変わりはありません。今年
から九月十五日が「石狩鍋記念日」
に認定されました(日本記念日協
会)。缶詰の日、そしてこの石狩
鍋記念日とともに覚えておきたい
のが、カムバックサーモン運動と
インディアン水車のこと。

前者は百八十万都市のど真ん中
を流れる石狩川の支流、豊平川に
昭和五十六年(一九八一)、その
二年前に約三十年ぶりに放流した



千歳市街地にあるインディアン水車。隣接のサケのふるさと館では川を上るサケの姿が見られる



稚魚が親サケとなつて戻ってきた
のでした。その後も放流が続けら
れ、今日では自然産卵と人工増殖
の両方によって、サケの姿が見ら
れる川となりました。

後者もやはり石狩川の支流、千
歳市街を流れる千歳川で、アメリ
カインディアンの漁法を利用した

水車がサケを捕獲しています(昨
年は八万三千匹)。日本海さけ
ます増殖事業協会が毎年、人工ふ
化、稚魚放流を行っており、隣接
の「千歳サケのふるさと館」の水
中観察室では、そ上するサケの姿
を見ることが出来ます。

いずれも川がきれいになってい
る証し。今後も環
境維持・向上のバ
ロメーターとして、
石狩川とサケを見
守っていききたいも
のです。



サケを呼び戻す運動の象徴
昭和五十九年に建てられた
豊平川さけ科学館
ここにもサケがいる



口の職人の技を間近で見
て、自分も実際に体験し
て仕事の可能性を広げて
みよう——「第七回札幌技能フェス
ティバル」が八月十日、札幌市白石区
の札幌コンベンションセンターで開
かれ、家族連れなど賑わいました。

いろいろな職能の分野で現役の
高齢化が進み、後継者難も悩みの種
。第一次産業のみならず第二次産業に
従事する人が減り、サービス業に流
れているのは周知のこと。

その未来の後継者となるべき子供
たちが、塾通いやテレビゲームの普
及で外で遊ばなくなり、鉛筆一本削
れなくなっているというのは、もう
かなり以前の話です。おまけに情報
源がテレビやパソコンだけになって



指を使う、手を動かすって、楽しい！
こんな仕事をやりたい、と思ってもらえたかな



しまつては、世の中にどんな仕事か
あるのかもよくわからないでしょう。
そこで、子供たちにもっとものづ
くりの楽しさを知ってもらおうと同
時に、技能士について理解を深めても
らおうというのがこのフェスティバ
ル。会場には建築や塗装、左官、板金、
造園、石材加工など十六のコーナー

集まれ 未来の 職人たち！

「第7回札幌技能
フェスティバル」から

が設けられ、
子供たちが思
い思いの体験
を。親子でタイ
ル張りに夢中になつた
り、女の子がカンナやノコを引いた
りと、みんな楽しそうでした。
いずれの日にか、この子たちの中
から一人でも多く職人の世界に入り、
後継者になつてくれることを期待し
ましょう。



道具で

道草30年

良いものを作っているところからつぶれていく
こんな日本にしたのは他ならぬ私たちだ——
なじみの金物店の主人の話に日本を憂う

坂一敬

レトロスペース坂会館・館長（坂栄養食品開発部長）

小型の金づちを買いに金物屋へ出向いた。この店はずっと私が通った店で、店主は金物のことなら何でも知っている感じのおじさんである。

話の中で、彼がぶら下がっている一本のペンチを指して「この会社もなかなか大変なようだよ」と言う。

私「どうして？ このペンチは高いけれど、ほぼ一生ものだ。日本でもトップクラスのいいペンチを作っているのに」

彼「いいペンチを作っていたから大変になったのだ。いいものは高い。一丁、三千六百円以上はする。百円でもペンチは売っているし、五百円も出せばまあまあのも

のが買える。もつともそのうち甘くなつてしまふけれど、当座の用は足せる。ここのは何年使つてもそんなことにはならない。

しかし、今のお客さんはそんな高いペンチはまず買ってくれない。工務店にしても、今の若い者は道具の使い方もろくに知らない。高い道具を与えてもすぐに壊す。安いので十分。かくして、高いけれどいいペンチを作り続けたこの会社は、今は苦しいというわけだ。

ペンチ談義から 現代日本を垣間見た。

もつともペンチだけではない。ノコを目立てして使う人もまじらない。カンナやノミも研げなくて職人が笑わせる。オレの店も、ホームマックに比べて高いという訳でお客はサツパリだ。一生使えるようないいものは



高いのだが、その辺のところがかつてもらえない」

私は思う。たしかにその通りだ。物を作り出す道具が大量に捨てられていたのはかなり前のこと。いい道具を使わなければ、良い物は作れない。

ちよつと力を入れてドライバーを回すと、くるつと一回転して十字が

つぶれてしまうネジ。引き抜くとグニヤリと曲がり二度と使えないクギ。ネジやクギは基本のもの。それがこんな状態では、これで作った家が十年しか保証がないというのもうなすける。

工場で作つて来たものを現場で組み立てる今の住宅。法隆寺はまだ立っているというのに。より技術の進んだ今の時代に作られた家が、たつたそれだけしか持たないのはどうしたことなのか。年輪五十年の木材で作つた家は年輪分だけは持つといわれた時代が、つい一昔前にはあつたはずなのに。今の集成材の家の柱は年輪がどこにあるのかもよくわからない。

ペンチ一丁の話からも、現代というものの一端を垣間見ることのできた目ではあつた。

帰りぎわ、私は店のおじさんに

言った。

「このペンチ、買っていく」
「坂さんとこ、ペンチあるしょ」
「ある！ だけどもう一丁買っていく。当分使わないと思うけど、それでも買っていく！」

「この営業がいつ来るかわからないけど、今日の話をしたらきつと泣くかもよ」

私としてはペンチを買わずにはいられなかつた。良い物を作るがゆえにやつていけなくなる今の日本の姿。絶対におかしいと思う。

そう思いながらレトロにもどり、動かなくなつたというオルゴールの箱をあけてみた。歯車の一個がプラスチックで作られてい

る。金属の歯車とプラスチックの歯車がかみ合えば、数年してプラスチックのほうに摩擦してダメになることはあきらか。もうこれは直すことは無理。このように部品の一部に弱いものを使えば数年でダメになり、また新品を買うしかなくなる。

これはオルゴールだけではないだろう。大量生産し大量消費していく全ての物に通じることではないだろ



うか？ そしてそれを一方では許している我々日本人、やはり今の世を作り出したのは誰でもない我々なのだ。この付けはきつと我々の上に降りかかつてくることと思う。

今、使用しているペンチがダメになり、新しく買ったペンチを使う日まで元気でいられるとは思われないけれど、家のリビングにさげてあるその新しいペンチをながめながら筆をおきたい。

使うことはないはずだが
思わず買ってしまったペンチ
坂家には代々使っている
上のペンチの他に
愛用のペンチもあるのに

何かに追い立てられるように過ぎていく毎日。いつもそこにある時計に、足を止めることを忘れていませんか。

創建百三十周年、 日本最古の 鐘の音。

明治十一年（一八七八）十月、札幌農学校の演舞場として建築され、今年で創建百三十周年を迎える札幌市時計台。時計台とは、時計を見やすいように高い位置に据え付けた独立した建物（塔）のことです。兵庫県豊岡市出石の辰鼓櫓とともに日本最古の時計



台とされていますが、辰鼓櫓は、そもそも辰の刻の城主登城を知らせる櫓だったいわば和の代表。こちらは、簡素で飾りの少ないバルーンフレームというアメリカの建築様式の一つです。四方に響く澄んだ鐘の音は、洋の息吹の最先端でもありました。



●本づくりのパートナー
(社)印刷紙工

Now Printing

居間で本づくりセミナーを
自分史など本をつくりたいと考えている人のために、出前の本づくりセミナーを承ります。三人以上のお集まりで会場をご用意いただけます。日時をご相談の上、印刷担当者や編集者がお伺いいたします。ご自宅の居間でも結構です。もちろん無料です。

記念誌は未来への道しるべ
企業や団体の十年を一区切りとする創立周年、二十周年、三十周年と歴史を重ねていく度にその歩

本 つくってみませんか
句集・歌集・詩集・小説・随筆集・自伝・体験記・回想集・画集・写真集



葦牙叢書第九十二集
句集「白神岬」
川内谷弘美

B6判・246ページ

白神岬とは、松前町にある北海道最南端の岬。海峡を挟んで津軽連山を望むことができます。著者は昭和15年、この地に生まれ、俳歴50年

という町の床屋さん。
福祉施設や病院などへの出張理髪の際、PTA会長、少年補導員、商工会理事といった要職にもあるので、俳風には生活全般にわたって心温まるものがあります。
初期の作品に、
研ぎ上げる鉄の切れ味今朝の冬口のしわ集めてババの草の笛子らの声村を吊り揚げ風上る生活感のあるものには、
娘の籍を抜いて立冬の重き靴娘の鼻緒ゆるめて送る七五三また仕事がよく表われている遺髪切る事も仕事や夏寒し昆布漁済むまで暇な村床屋ほかに
(苦小牧市長賞)
老ゆるとは親に似る事障子張るなど400句が収められています。

みを記録しておかなければ資料が散逸、功績のあった人も物故していきます。未来への道しるべ、歴史はきちんとまとめておきたいものです。企画、編集、印刷、どの段階からでもご用命を承っております。

小紙を無料で差し上げています
慌しい時の流れに、ほっと一息つける話題を提供していきたいと願っている小紙。ご希望の方には無料で定期的にお送りしております。印刷紙工までお申し込みください。